

## 4 施設イチゴ栽培におけるIPM技術の検討

### ねらい

施設イチゴ栽培において、病害では育苗期から定植初期にかけて炭疽病、本ぼ定植後はうどんこ病、灰色かび病などが問題となる。一方、本ぼ定植後、虫害では、ハダニ類、アブラムシ類が問題となることが多い。このような病虫害の防除手段として、新たに開発された植物病害防除装置（前ページ）と天敵やその他の防除技術を組み合わせ、新たなIPM技術の可能性を検討した。

### 成果

試験は場内の無加温ビニルハウスで、品種「章姫」を用い、土耕栽培で行った。定植は2008年9月24日、外張り被覆は周年で、内張り被覆は11月17日から行った。

#### (1) 処理区の構成

区 ボトキラー水和剤ダクト内散布区

送風機とダクトを組合せ、11月17日から1日1a当たり1.5gをダクト内に投入し、18時から2時間、毎日送風した。

区 タフナレイ照射区

11月5日から照射を開始し、毎日、午前9時から午後3時までの6時間の照射とした。

区 ケイ酸資材（とれ太郎）定植時土壌混和区

粒状ケイ酸カリウム（可溶性ケイ酸30%）を株当たり11g定植時土壌混和した。

区 区と 区の組合せ区

区 区と 区の組合せ区

区 区と 区の組合せ区

区 区と 区と 区の組合せ区

対照区

接種方法はうどんこ病、灰色かび病とも罹病果をハウス内に吊り下げ、間接接種とした。果実収穫時に発病果率を調査した。

ハダニの初発生確認後、各区に、12月4日に天敵のチリカブリダニ、1月23日にミヤコカブリダニをそれぞれ放飼した。ハウス内にバンカー（天敵の餌となるダニ類のすみか）として稲ワラを設置した。

#### (2) 結果

うどんこ病に対し各区共、殺菌剤を2回（対照区のみ3回）散布し、発生推移を調査したところ、それぞれ単独の処理では防除効果は低かったが、組み合わせることで防除効果が高まった（表）。

灰色かび病に対しては対象の殺菌剤を1回散布し、発生推移を調査したところ、各区で防除効果の差はなかった。（データ省略）

ハダニの発生はみられたものの、定植以降ダニ防除薬剤の散布は必要なく、天敵の効果から目立った被害もなかった。（データ省略）

### 普及上の注意事項

今回検討したIPM技術は、いずれも予防効果は高いが「殺菌」効果はないため、発病すると「治療」効果は劣る。今回のように多発条件下では、化学農薬で発病を抑えた上でIPM技術による防除の継続が必要である。

松浦 克成（環境・病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2448）

表 各防除技術の組み合わせによるイチゴうどんこ病に対する効果と防除回数

		ボトキラー処理	タフナレイ処理	ケイ酸処理	殺菌剤散布回数	発病果率	防除率
単独処理区	処理区Ⅰ	○			2	67.6	0
	処理区Ⅱ		○		2	24.6	62.7
	処理区Ⅲ			○	2	57.5	12.8
組合せ処理区	処理区Ⅳ	○	○		2	14.1	78.6
	処理区Ⅴ	○		○	2	34.2	48.2
	処理区Ⅵ		○	○	2	12.7	80.8
	処理区Ⅶ	○	○	○	2	10.1	84.7
対照区					3	66	—